

2012年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告

著者	金田 忠裕, 北野 健一, 東田 卓, 中谷 敬子, 栗田 佳代子, 溝手 朝子, 保福 一郎, 清水 栄子, 吉田 香奈, 加藤 由香里
引用	大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要, 2013, 47, p.43-48
URL	http://doi.org/10.24729/00007562

2012年度アカデミック・ポートフォリオ 作成ワークショップ報告

金田忠裕^{*1}, 北野健一^{*2}, 東田卓^{*3}, 中谷敬子^{*1}, 栗田佳代子^{*4},
溝手朝子^{*5}, 保福一郎^{*6}, 清水栄子^{*7}, 吉田香奈^{*8}, 加藤由香里^{*9}

A Report on the Workshop of Academic Portfolio in 2012

Tadahiro KANEDA^{*1}, Ken'ichi KITANO^{*2}, Suguru HIGASHIDA^{*3}, Keiko NAKATANI^{*1},
Kayoko KURITA^{*4}, Tomoko MIZOTE^{*5}, Ichiro HOFUKU^{*6}, Eiko SHIMIZU^{*7}, Kana
YOSHIDA^{*8} and Yukari KATO^{*9}

要旨

大阪府立大学工業高等専門学校では、教育改善の一環として2009年よりティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催している。さらに、2012年からはティーチング・ポートフォリオ作成者を対象として、アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップを同時に開催している。本稿では、2012年度のアカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップの概要を説明した後、ワークショップ参加者の感想を報告する。

キーワード: アカデミック・ポートフォリオ, 教育改善, 統合

1. はじめに

大阪府立大学工業高等専門学校（以下、本校と略す）は教育改善の一環として2009年よりティーチング・ポートフォリオ（以下、TPと略す）の作成に取り組んでいる[1]。また、2012年3月からは同時並行してアカデミック・ポートフォリオ（以下、APと略す）作成ワークショップ（以下、WSと略す）を開催している[2]。本稿では、2012年8月と12月に開催したAP作成WSの概要について説明した後、WS参加者の感想を報告する。

2013年8月19日 受理

*1 総合工学システム学科 メカトロニクスコース

(Dept. of Technological Systems : Mechatronics Course)

*2 一般科目理系 (Natural Science)

*3 環境物質化学コース (Environmental and Materials Chemistry Course)

*4 東京大学 (Tokyo University)

*5 山口県立大学 (Yamaguchi Prefectural University)

*6 東京都立産技高専 (Tokyo Metropolitan College of Industrial Technology)

*7 愛媛大学 (Ehime University)

*8 広島大学 (Hiroshima University)

*9 東京農工大学 (Tokyo University of Agriculture and Technology)

2. ワークショップの概要

2012年度のAP作成WSの概要を表1に示す。2012年度は2回のAPWSを開催し、計6名がAPを作成した。スーパーバイザーは現東京大学の栗田佳代子氏にお願いしている。現在、本校のAPWSのメンターを担当できる教員は6名となった。

表2にAPWSのスケジュールを示す。基本的に同時開催するTPWSと同じスケジュールでおこなうこととし、最終日のプレゼンも同時におこなっている。異なる点は、オリエンテーション後にAPシート作成の時間をとっていることである。

表1 2012年度に開催したAP作成WSの概要

回	日程	メンティー	メンター	スーパーバイザー
1	3月1～3日	5名（うち学外3名）	2名	—
2	8月8～10日	3名（うち学外2名）	3名	栗田佳代子氏（大学評価学位授与機構）
3	12月26～28日	3名（うち学外3名）	3名	栗田佳代子氏（東京大学）

表 2 AP 作成 WS のおもなスケジュール

	第1日	第2日	第3日
午前		個人ミーティング(2) AP 作成作業	個人ミーティング(4) AP 作成作業
午後	オリエンテーション AP シート作成 個人ミーティング(1) AP 作成作業	個人ミーティング(3) AP 作成作業	AP 作成作業 プレゼン準備 AP プレゼンテーション 修了式
夜間	夕食会 AP 作成作業	夕食会 AP 作成作業	

3. AP 作成の実際

3.1. メンティーとして

東田卓 私がアカデミック・ポートフォリオの執筆を検討したのは、これまで教育面にしかスポットライトが当たらなかったティーチング・ポートフォリオに、研究とサービス面の視点を加えて執筆できるからである。前回、ティーチング・ポートフォリオ執筆時の動機は「自己省察」と「管理職から教育業績の開示があった場合、速やかに提出できるようにするため」であったが、今回は全く異なり、とにかく是非書いてみたいという強い衝動があったからである。

今回はスーパーバイザーでもある栗田さんが私のメンターを担当して頂く機会に恵まれ、経験の豊富な栗田さんに思うままをメンタリング時に話したところ、「思う通りにお書きください」ということで、一心不乱に書いた記憶がある。執筆当時を振り返れば、本校では「教育」を中心に、研究とサービスが多数絡み合っていることがボトムアップ法でわかってきた。また、振り返ると教育・研究・サービスが大変近い位置にあるのが高専の特徴であると分かってきた。高専では教育とサービス（校務）の中心に本校で最も重要な「担任業務」があり、教育と研究の中心に「卒研・工特研究」がある。これは担任制度のあまりない大学ではまれな事である。また、大学院生が中心の自発的な修士博士の研究は大いに研究側にシフトしている。担任も卒研も教員と学生とまさに直に向き合う高専ならではの体制であると感じた。出前授業や公開講座、体験入学は地域貢献でありながらも、将来入学してくれる児童・生徒への教育であり、ある種「先行投資」である。入学してくれないからと言って、決してこれらのサービスは無駄にはならない。地域貢献と理科の啓発活動として本校に課せられた重要なミッションであると再認識した。これらはすべて複雑にからみ合っており、この3つが完全には分類できないことが確認できた。最後にこれらの中心にあるものはと自らを振り返ること

が一番の問題となった。これら交点には多くの実績はあるものの、その「推進力は？」「本質は？」と問われると大変困窮した。結論として母校のモットーである「Mastery for Service」を引用することにした。研究は自然の本質を探求することであるが、やはり教育はサービス精神なくしてできないものであるし、研究成果は最終的には他の研究者に還元するものであると考えた。大いに自らを振り返ることができた3日間であった。最も語りたかったメンターの栗田さんであったが、自由にお書きくださいとのことで、深いメンタリングの機会を逸し、振り返るとやや心残りであった。

本校教員である以上、「教育」だけの教員はおられないと思う。是非アカデミック・ポートフォリオを執筆し、自らの教育・研究・サービスの3つについて振り返ってみられることをお勧めしたい。

溝手朝子 所属する大学で人事評価が始まり、その様式に閉口していた矢先の APWS の案内だった。一年前に TP を書きながら、全学教育と学科専門教育の二本柱に携わる自分の立場の解釈に長時間費やしたこともあって、大学教員としての活動が俯瞰できるという AP には、一種の期待と、今後の発展性を感じていた。

教育と研究の強い絆について疑う大学教員は皆無であろう。しかし、サービス活動が大学教員にとってどのような位置づけにあり、それが個人の教育・研究活動にどのようにフィードバックされていくかについて、合理的解釈に到達することは容易ではない。むしろ、研究の阻害要因と感ずることも稀ではなく、ともするとこれが負の連鎖を生む。人事評価の様式に閉口していた要因の一つには、このような背景に加えて、他者から設定された項目について自己評価をするという形式にあったように思う。分断された業務項目に対する評価は個人の理念や教育感を反映させる余地のない、異質なものとして認識されるのではないだろうか。

AP に取り組むにあたり、大学教員として教育活動や研究活動、サービス活動のそれぞれに対する自分の立ち位置が見えてくることで自然に3つ領域が繋がり、一つに集約された理念が浮かび上がってくる。そしてなによりも収穫だったのは、研究活動の領域で自分の生命線となる原動力が生まれていたことに気づかされたことであった。それは、「未だ見ぬ次代への夢と未来への挑戦」であるが、どんなに多忙になろうと、研究活動を蔑にしてはすべてを失うことになるということを再認識した。

個人にとっての AP の作成は、不合理と思える雑多なものを整理して、教育・研究・サービス活動が3次元的に作用し、発展的未来へ繋がる多角的戦略の策定を目的と

していると実感した。また、組織としての視点からは、時間軸を組み込んだ教員把握（または教員評価）として貴重な資源となり、発展的大学の鍵となるであろう。

全体を俯瞰できるように誘導してくださったメンターの先生、AP作成の時間と空間と想いを共有したメンターの皆様に心より感謝するとともに、山口県立大学でのTP/APWS定着にご支援を賜りたくお願い申し上げます。

保福一郎 私がTP〔初版〕を作成したのが平成22年12月のことである。当時、私は教育企画改善室長という校務を担っており、教員個々の授業力をあげる試みとして学校としてどのようなことを仕掛けたら良いのかを模索していた。その頃、ある研修会でTPのミニワークショップに参加し、これは間違いなく教員個々の自己省察になると感じてその場での講師（阿南工業高専：松本氏）と挨拶を交わし、その年の12月に阿南高専でTPワークショップ（TPWSと記す）に参加してTP〔初版〕を作成した次第である。これを機会として、現在では本校でもTPWSを実施している（平成25年度で3回目）。このような状況下、大阪府立大学高専でのTPWSに私がメンターとして参加した際にアカデミック・ポートフォリオ（以下APと記す）の作成現場に居合わせる機会を得、その瞬間に私自身の内面からAPの幹となる統合についての「気づき」が芽生えたことを実感している。私は高専に赴任して23年が経過したが、その期間で、教科指導は基より、様々な教育・研究・組織運営を行ってきた。そして、これらの高専での貢献を通じての私の「気づき」は、「タフな技術者を養成する」ためのものであると一瞬の内にひらめいたのである。つまりAPでいう「統合」のイメージが先にできあがっていたのである。そこでこの統合のイメージを深く掘り下げ、タフな技術者とは一体どのような技術者であるのか。また、タフな技術者育成と本人が行ってきた教育・研究・組織運営との関係はどのような関係で結びついているのかを整理するために大阪府立大学高専のAPワークショップに参加した次第である。メンターの北野氏とのメンタリングを通じ、特にTPに関してはTP更新原稿からさらに内容が精査され新たな理念が付け加えられた。その結果、高専での教員としての教育・研究・組織運営についての全体としての自己省察が整理された形でまとめられ、APを完成させることができた。更にAP原稿を仕上げる過程を通じ、私個人の行動意識の中での座右の銘とも言うべきイメージが浮かびあがってきた。この内容もAP原稿の「最終章」に付け加えさせていただいた。この様にAP作成は高専教員として生きてきた今までの全

ての自己省察を行う極めて貴重な機会であったことを最後に記しておく。

清水栄子 2012年12月に開催されたAP作成WSに参加した。年の瀬の慌ただしさを遠くに感じながら、会場に向かったことを思い出す。

参加動機は「教育と研究に取り組んできたこれまでの振り返り、今後の進路を改めて考えてみたい」という気持ちからだった。AP参加者に「今後の進路」というのは、少し奇異に感じる方もいらっしゃるかもしれない。この問いを発したのは、私の経歴の多様さによるものであったと思う。WS参加時は、私大職員、公立大学協会職員を経て、授業を受け持たないFD担当の任期付き教員として阿南工業高等専門学校に勤めており、その任期の最終年度であった。この年の3月には、社会人大学院生として後期課程を修了していた。自分の進むべき道を再認識しようと思うのはむしろ当然であったとも言える。

WS参加までにスタートアップシートの作成、TPの更新と圧縮を行った。そして、WSではAPシートの作成、教育、研究、サービスに関するそれぞれの記述と統合、目標設定を行った。それなりの準備をして臨んだものの、やはり、AP作成は思ったようには進まなかった。しかし、APシートの作成とメンターによる個人ミーティングでの導きは心強い指針となった。

APシート作成とは、これまで行ってきた活動を付箋に書き出し、教育・研究・サービスに分類し、図式化させていく作業である。付箋に書き出したそれぞれの活動は、教育だから、あるいは研究やサービスだからと意識して行ってきたわけではない。しかし、シート作成作業を通じてこれまでの活動や研究内容等を振り返ることができる。加えて、活動の分類と図式化をすることで自身の活動を客観的に見つめることもできる。このシートをじっくり眺めることによって、教育、研究、サービスと各々の関連や自身のコアに気づくことができ、APを書き進めていきやすくなった。

メンターによる導きは、今回のAP作成になくはならない存在だった。イレギュラーな経歴を持つ私にとって、これまでの教育・研究・サービス活動を振り返り、コアを見つけ出すことは、かなり難しい作業であった。しかし、「学び一主体的に向き合い、体得してほしい」という“コア”を見つけ出すことができたこと、そして研究と教育がスパイラル・アップしているということに気づくことができたのは、メンターの冷静で穏やかな問いかけと導きのおかげだと感謝している。

AP作成は、教育に携わることを考えている大学院生に

もぜひお薦めしたい。もちろん事前のTP作成が大前提であるが、TPやAP作成は、大学院生のキャリア・デザインのツールとしても利用できるからである。私自身の今後は、定期的なAP更新とともに、メンターとしてAP作成者に少しでも貢献したいと考えている。最後に、このような機会を提供して下さった皆さまに心より感謝申し上げたい。

吉田香奈 今回、学外からAP作成WSに参加させて頂いた。私の所属する大学では2011年より全学のFD部会のもとでTP作成WSが動き始めたばかりである。今後、WSを充実させていくためにTPのアドバンス版であるAPを作成しておきたいと考え、参加させて頂くことにした。3日間、メンターとスーパーバイザーの先生方の支援を受けて無事にAPを書きあげることができたことに心よりお礼を申し上げたい。

作成過程では、まず、事前課題として「TPの更新および凝縮」と「APスタートアップシート」の2種類のファイルの作成が求められた。これらはWSの10日前に締め切りが設定されており、「AP作成ガイド」と「TP更新チェックシート」の指示に従いながら作業を進めていった。TPの更新・凝縮版の作成は、所属大学を異動したこともあり、思いがけず時間を要した。さらに、APスタートアップシートの作成では「自身の教員としての活動の整理およびエビデンスの収集と簡単なふりかえり」(AP作成ガイドより)を行うことを目的として、教育、研究、管理運営・社会貢献活動の三者すべてを振り返るとともに、三者の関係性を考え、最後に将来の目標を述べるという宿題が課された。これらを言語化するのには非常に時間がかかった。しかし、そのプロセスは実は大変楽しく、自分がこれまで意識していなかった点に気付くことが多かった。これらをWSの当日にメンターとの会話からさらに掘り下げ、文章化していくことを考えると楽しみであった。

AP作成WSの当日、初めて訪問した大阪府立大学高専では非常に温かく迎え入れていただいた。自己紹介に引き続き「APチャート」の作成を行った。これは、頭で考えていることを実際にマッピングすることで視覚化し、APの作成に役立てることを目的としていた。続いて個人ミーティングが行われた。スタートアップシートとAPチャートについて話し合う中で、メンターからは「活動の核となるものは何ですか」ということを何度も尋ねられた。即座に回答できず、1日目は持ち帰りの宿題となった。

2日目の個人ミーティングとAP作成作業の中で、おぼ

ろげながら自身の活動の核が見えてきた。これは、一日目に作成したAPチャートがきっかけとなり、目指す教員像である「高い研究力に裏打ちされた教育・管理運営・社会貢献活動を行うことのできる教員」が明確になったことが大きい。そこで、さらに12の具体的な教員像を掲げ、それぞれが教育、研究、管理運営・社会貢献とどのような関係にあるのかを表形式で整理してみることにした。この「目指す教員像と3つの分野の関連性」を考える作業が今回のAP作成WSの中で最も楽しく、活動の省察と今後の目標を考える上で意味のある作業となった。

3日目は最後のAP作成作業を行い、最後にプレゼンテーションを行った。A4用紙1枚でAPの概要を説明するために、APチャートの完成版と表について発表を行った。他の参加者のAP、TPについても話を伺うことができ、非常に参考となった。

今回、APを作成してみて感じたことは、TPよりも総合的な振り返りをすることができ、大きな達成感があったことである。それは、研究や管理運営が教員としての活動のかなりの部分を占めているためである。これらをすべて振り返り、三者の関係性を考察し、これまでの活動の成果を確認できたことで自信を持つことができた。そして、改めて自分が大学教員として何を目指してきたのか、そしてこれからどうしていきたいのかを明確化することができた。特に、中堅教員となった今、このような機会を持てたことは幸運であったと感じている。

なお、この経験を活かし、2013年度からは学内で新たにAPワークショップを立ち上げる予定である。

加藤由香里 2007年にTPを作成して以来、更新作業を行っていなかったため、今回のAP作成は非常に楽しみであった。TPと比較して、どのような学びが得られるのか、また、教師の専門的成長という観点からAPはどのような効果が得られるのかについて、自ら体験することにより、自分なりの答えを見出すことを目標とした。

また、時間に追われて作業をすることを避けるため、あらかじめAPを作成して、WSに臨んだ。

<APチャートについて>まず、初日にオリエンテーションで、メンターから「AP作成においては教育、研究、社会貢献・運営(サービス)を統合し、それら三つを貫く“核”を見出すことが重要」という説明を受け、APチャートを作成する作業に取り掛かった。B4サイズの白紙に、教育・研究・社会貢献に分けて、自分の教育における工夫・方法、研究実績などを思いつくまま付箋に書き、それを整理する作業を行った。その後のメンターとの個人ミーティングでは、APチャートを参照しながら、

それぞれの項目ごとにもう一度深く内省する作業を行った。しかし、三つの活動を統合する「専門的活動と目標の統合」を見出すには至らなかった。この活動には、「教育」、「研究」と「社会貢献」は独立しており、それを関連づけることにより、新たな発見があるという前提があるように思った。それに基づく作成の手続きに、「個人の興味に応じて様々な内容を選んで配置」することで作成した TP とは異なる印象を受けた。この作業により、教師自身の振り返りが促進される場合もあるが、違和感を感じる部分もあるかもしれないと個人的に思った。これは TP の作成でも同様に感じる点である。

<AP作成の目的>以前、TP を書いた動機は、今までを振り返り、今後の目標を発見することであった。AP でも同じように、3つの活動について現状をまとめ、さらに、今後の方向を見出すために行うものではないかと考えていた。3つの活動の総体を AP と呼び、その活動の力点は、教員の成長、組織における役割によって変化していくものであると思う。AP として、そのダイナミズムや変化がうまく描き出せれば、変革の時代を生きる教員にとって意味のあるツールとなると考える。また、その時々により、個人の興味や組織の要求は異なるので、現在の「教育」、「研究」と「社会貢献」の関連を洗い出して、それを統合する必要があるのかが、自分としてしっくりこないところがあった。

メンターの指示に従って、自らの専門分野において独自性を確立するために何が必要か（研究）、それを学生にどう教えることが（教育）、さらにそれを学内外の活動にどういかしていくか（社会貢献）をまとめた。同じ活動でも、対象によって、研究になったり、社会貢献とったりする場合もある。その区分が難しかった。たとえば、所属組織において、自らの教育活動（私の場合は FD）を行うことに、研究的な特質もあり、また、その成果が他の機関で利用されることもある。「教育」、「研究」と「社会貢献」は独立しているのではなく、教育を改善することをめぐる取り組みに関連しているように思う。

<APの意義と可能性>APを書きながら感じたことは、作成のプロセスを標準化することに対する違和感であったように思う。TP あるいは AP の作成をなぜ行うのかを問わないまま、それぞれの「発見」のプロセス標準化する方向にすすんでいくこと、その点について担当者ならびに参加者が考える必要があるのではないかと思った。

3.2. メンターとして

東田卓 2012年8月のAPのメンターを経験したすぐ後、2012年12月にAPのメンターを担当する機会に巡り

会えた。担当したメンターは教育系の大学教員の Y さんで、ティーチング・ポートフォリオの書きぶりから大変真面目に教育に取り組んでいることが予想された。

TP 執筆時は大変クールでかつ客観的に教育に対する思いを書かれた感じが TP から読み取れた。そこで、是非 AP はある種「情熱的」に書いていただければと思いつつメンタリングを始めた。

メンタリングにおいて TP 執筆の時は比較的淡々と書かれたとお話いただいた。教育・研究活動は大変立派で数多くの学会論文を発表され、また多くの外部資金獲得をされ、短い教員歴の中でこれらの成果を挙げられる動光源はどこにあるのかをメンタリングの中でぶつけあう事ができた。Yさんとメンタリングしていく間に、「教育」と「研究」が特に「一体化」していることが共感できた。また、サービスや校務もやはり研究と一体化していることに気づかれた。さらに執筆を進める中で、Yさんはやはり「教員としての自分の中心は研究」であるということに気づかれた。そして、すべての活動が有機的に絡み合っていることを再認識し、サービスが研究と直結していることから「校務・サービスにやらされ感がない」事を感じることができた。これらをまとめる過程で、自分が主体的に行なっている大学での活動を12個に分けられ、それぞれを教育、研究、サービスに分けられた。それらの貢献度に重み付けをして AP チャートに貼り付けるという作業をされた結果、すべての活動が研究に直結していると実感された。最後に「高い研究力に裏打ちされた教育・管理運営・社会貢献活動を行うことのできる教員」と AP を締めくくられた。

AP 執筆の醍醐味は自らが高等教育機関で何に軸足を置き、今どのような教員であり、これからどのような教員を目指していくかにあると思う。教育、研究、サービスのどれを欠いてもいけないし、それらが相乗効果を持って本務として邁進できれば素晴らしいことであろう。AP は TP 以上にメンタリングに於いてメンターとコミュニケーションを重ねることが可能で、様々な活動においてお互いに共感でき更に、メンター自身のモチベーションを上げる効果があると感じる。今回のメンタリングにおいて、メンターに熱い思いを持って書いて欲しいと期待したが、クールな Y さんなりにその情熱を感じることができ、楽しい AP 初メンターを経験することができた。

中谷敬子 アカデミック・ポートフォリオのメンタリングは、メンターの人生に関わる想いや信念を見つける機会に立ち会う時空間であると感じる。ティーチング・ポートフォリオのメンタリングももちろん「理念」を明確化（言語化）するための深い省察に立ち会うのであり、なぜ、そのようなティーチングをするのか、その

行動や気持ちの根っこにあるものを見つけ出すという点で、似ているのであるけれど、アカデミック・ポートフォリオのメンタリングの場合は、「教育」「研究」「サービス」の三つの領域を統合する過程において、メンティーが、少し離れて全体像を俯瞰し、俯瞰してつかんだイメージを大切にしつつ、もう一度、それぞれの領域での行動や、想い、その領域の理念に当たるものを見つめなおす、そのようなプロセスが何度も繰り返されながら、よりじっくりくる、納得の統合を達成するように感じられる。そのプロセスの中で、メンティーが、自身もまだイメージとして漠然としている、しかし、どうも「核」につながりそうな感じを持つ「何か(キーワード)」を表現しようとする。自らの深いところでの省察の中で掘り起こされた事柄が絡み合い紡ぎ出されたその言葉や表現をよりじっくりする形にしようと格闘するその姿勢に、いつも深い感動と敬意を覚える。一緒にいられてうれしいと思う。メンティーとメンターは、専門領域が異なることはもちろんだが、来し方、所属組織も異なっている。そのため、そのメンティーが捕まえそうな「何か」を、メンターが共有しようと質問を投げかけ、対話が進む。「メンターは伴走者」と言いながら、この過程では私には、道が見え始めたメンティーについて行くために、メンターがメンティーに手を引いてもらっている感覚を持つ。そんなキャッチボールの中で、メンティーにハッとするような気づきが生まれる瞬間がやってくる。その気づきの後、再びの俯瞰と各領域の理念を見つめたとき、「ああ、だから、私はこうしていたんですね」という言葉がメンティーから出、共に、その達成感をじんわりと味わうのは格別である。

メンターの機会をもらえらうほど、「聴く」ということが大切であることを痛感する。ひたすらに聴く。聴くことを通じてだけが、メンターは、メンティーをそのままに理解することにつながる。そして、メンティーに聴かれることにより、メンティーは自己理解を深める。メンティーの言葉をよく聴いて、キーワードかな?と思う言葉は覚えておいて、メンティーの思考の流れの邪魔にならないように一緒に流れの中に漂いながら、キーワードに触れる間いかけをしながら、一緒に、思考の流れに寄り添う。そんな風なメンタリングができれば素晴らしいなと思っている。

金田忠裕 この度、私自身がメンターを経験させていただいて学んだことが2つあった。1つ目は『主体性をどのように育成するか』である。メンタリングの中で「メンター活動を通して、メンティーの主体性を導くことができた」という言葉に衝撃をうけた。学生の主体性をどのように育成していけばよいかについて悩んでいた自分

が全く気付いていないことであった。メンタリングでは、メンティーの「気づき」にメンターは注意を払い、様々な角度から質問をして、メンティー自身に気づかせることを実践している。この形態が主体性を育成する一つの方法であると改めて確信した。教員として学生の相談を受けて、アドバイスをしていたことが、メンタリングで役に立つことは理解していたが、それが学生の主体性を育成することに結び付くことに気づいていなかったのである。

2つ目は『教育分野における実践と理論的なバックグラウンド』についてである。メンティーのこれまでの経験談の中で、教育実践の中から理論的なバックグラウンドが必要で、研究活動に結び付いたことを伺った。それらが整理され、形になって見えてくることで、教育学の実践的あるいは理論的研究方法について学ばせていただいたと感じている。

AP作成WSへの参加は、過去にTPを作成したことがあることが条件のため、メンティーは深い省察をする経験を積んでおられる。メンティーの経験をTP以上に様々な点で学習できる機会であると再認識したワークショップであった。

4. おわりに

本稿では、2012年度に開催したAP作成WSについて報告した。

第5回のAP作成WSは2013年12月26~28日に開催予定である。この原稿がこれからAPを作成する諸氏の参考になれば幸いである。

本研究は日本学術振興会平成23年度(2011年度)科学研究費補助金(基盤研究(C))「高専におけるティーチング・ポートフォリオの普及とメンタリング技能に関する研究」代表者北野健一(課題番号23501044)による支援を受けて実施した。

参考文献

- [1]北野ほか:日本初単一教育機関内ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して、大阪府立高専研究紀要,第43巻,pp.63-70(2009)
- [2]金田ほか:日本初単一教育機関内アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して、大阪府立高専研究紀要,第46巻,pp.71-76(2012)